

第 4 回健康と環境に関する疫学調査検討会 における主な意見



検討事項

(1) これまで（第3回）の議論の整理について

- ①エコチル調査の参加者ポータルサイトについて
- ②参加者維持のための海外コホートの取組について

(2) 関係学術団体等からのヒアリング

- ①日本公衆衛生学会 磯博康先生の発表に関する質問、意見
- ②岡明先生の発表（小児神経発達領域）に関する質問、意見
- ③橋本貢士先生の発表（成人内分泌代謝領域）に関する質問、意見
- ④大江和彦先生の発表（健康医療情報におけるデータの連結手法）に関する質問、意見
- ⑤姫野誠一郎先生の発表（HBMによるばく露レベルの評価）に関する質問、意見

(3) 成果の社会還元について

検討事項（１）これまで（第3回）の議論の整理について

①エコチル調査の参加者ポータルサイトについて

- WEB上で参加者と様々なやりとりが出来ることは魅力的で、予算や参加者の負担の点からも良い取組であると思うが、個人情報とはどのような形で保護されるのか。
- データの活用を大いに進めてほしい。データの活用がしやすいようにデジタル化の視点を重視して体制整備を進めるべきだ。また、今後調査を小児期以降にも展開するなら、情報収集やサーベイの時点でデジタル化を進めるべきだろう。
- 参加者ポータルサイトの創設と広報戦略について、ポイント制の導入などの検討は素晴らしいが、逆に電子化によって参加者が離れていく懸念も感じる。アプリや企業の公式アカウント等は通知が多く、情報一件の重さが軽くなっていると感じる。アプリを持っていても長期間ログインせずに放置してしまうこともある。例えばキャラクターを育成するような仕組みがあり、質問票に回答すればポイントを獲得でき、ポイントで何かアイテムをそのキャラクターに与えることができるなど、アプリ単体の中で何かストーリーがあるような、ログインをさせ続けるような仕組みがなければ、現在行っているニュースレターや郵送物によるアプローチよりも、参加者からの反応が薄くなる可能性があるのではないか。

②参加者維持のための海外コホートの取組について

- WEB調査に関して、例えば、スウェーデン、デンマーク、ノルウェーの北欧諸国や韓国で、年単位でどのくらいのフォローアップ率かという情報はあるか。エコチル調査を13歳以降はWEB調査で行った場合にどのくらいのフォローアップ率を保つことができるか、先行事例からの情報は収集できるか。

検討事項（２）関係学術団体等からのヒアリング

①日本公衆衛生学会 磯博康先生の発表に関する質問、意見

● ライフコースアプローチの中の成育サイクルという考え方、次世代への影響という考え方で、生殖年齢という、性成熟期の男女に対する、次の世代に対するライフコースアプローチという考え方に関連して、日本公衆衛生学会として今後の対策をどのように進められるのか。

● 10代中盤から20代にかけてのコホートデータが不足していることが分かった。今後のエコチル調査の継続がこのニーズを満たす可能性を示している。

②岡明先生の発表（小児神経発達領域）に関する質問、意見

● 血中の鉛濃度が極端に高い場合に、フォローアップのための医療へのアクセスが必要かどうか等の判断をするために、どのような連携が必要か助言を頂きたい。

（なお、エコチル調査に参加している妊婦の中で、血中の鉛濃度が極端に高い者はいない。）

③橋本貢士先生の発表（成人内分泌代謝領域）に関する質問、意見

（質疑なし）

検討事項（２）関係学術団体等からのヒアリング

④大江和彦先生の発表（健康医療情報におけるデータの連結手法）に関する質問、意見

- 医療のデータベースについて、例えば小児がんなど、その人が過去に受けた治療に関しては5年間カルテとして保管されているが、成人になった時に自分がどのような治療を受けていたかの問い合わせが来るが、手術所見も探せないという事態が全国の病院で生じている。患者の医療と患者の利益ということから、被保険者番号をたどることによって、患者が受けた治療が分かる可能性、あるいは将来実用化される可能性はあるか。
- 個人情報保護との関係で、非常にセンシティブな情報なので、連結で顕名化されて情報が流れると大変であり、何重にも保護されており、研究に利用するには不自由もある。今までも度々議論にあったが、エコチル調査の貴重なデータの利用を可能にしていきたい思いは共通である。エコチル調査にもマイナンバーを活用できる可能性はあるか。
- エコチル調査で集めたデータは、今後成人期にも他の分野にも利用可能で貴重な情報であると思うが、当初のデータ収集時に参加者に対しどの範囲まで利用することを説明していたか。
- 被保険者番号の個人単位での履歴管理は現時点でどれくらい進んでいるのか。エコチル調査に参加している子どもが成人して世帯が変わった場合に、世帯が変わっても追跡することができるのか。

検討事項（２）関係学術団体等からのヒアリング

⑤ 姫野誠一郎先生の発表（ Human Biomonitoring（HBM）によるばく露レベルの評価） に関する質問、意見

- HBMはエコチル調査のreference dataになるものであり、エコチル調査と相互に補完し合うような重要なプロジェクトと理解した。
- ばく露レベルは国際間で大きく異なるということであったが、遺伝的な背景も国際的に大きく異なる部分がある。エコチル調査の中で、今後成果として出てくる遺伝要因と環境要因との相互作用を考えると、このようなreference dataがあることで、相互作用の国際比較が将来にわたって可能となる。reference dataを取得することも併せて今後検討していければよいと思う。
- 内閣府食品安全委員会の「評価書 鉛」を策定する際に、エコチル調査において妊婦の血中鉛濃度のデータはたくさんあったが、妊婦以外の女性のデータはなく、男性のデータ及び子どものデータは分析されておらず、データ不足を非常に痛感した。
- エコチル調査は対象者が限定されているので、HBMの目的とは合致しないところがある。また、エコチル調査において化学分析に時間がかかるということだが、分析のスピードが遅いと思う。できるだけ早く化学分析の結果が出ることで、様々な場面で利用が可能となる。継続的な変化を追い続けるという意味でも、早く結果を出さなければ、結果を出せた時には状況が変わった後であった、ということにもなりかねず、化学分析を早急に実施することをお願いしたい。

検討事項（3）成果の社会還元について

●これから妊娠する世代への情報提供は非常に大事だと実感した。一般の妊婦や保護者、これから妊娠する世代において、エコチル調査を知らない人が多いのではないか。まずエコチル調査という名前や目的を知ってもらうことが大変重要ではないかと思う。対話事業に参加された方は、重要な調査であると感じると思うが、対話事業などに関わる方は少ないので、より一般に広め、エコチル調査をまず知ってもらうことが大事であると思う。

●エコチル調査を知った上で、その情報にアクセスする入口や通路を作ることが大事で、エコチル調査を検索ワードに加えてもらえるような仕組みを作ることができればよいと思う。妊婦や保護者からはエビデンスのある情報が求められていて、エコチル調査の情報は重要である。

●現在発信されているエコチル調査の成果に関する情報は、ためにはなるが、文字が主体で専門用語が多く、難しく見えてしまうところがある。情報を発信する側として、なるべくわかりやすい言葉にしたり、Z世代といわれる人たちはビジュアルで視覚的に理解していく傾向が強いと言われるので、文字ではなくビジュアル化したりすることを心がけていくべきだと思う。

●「たまごクラブ」「ひよこクラブ」で、「たまひよ」というオンラインメディアがあるが、そのほかにも様々な妊娠・出産に関わるオンラインメディアがある。このような媒体が一緒になって、例えば低出生体重児が増えているといった内容を一斉に発信するような、何かキャンペーンを張ることができたら良いのではと考えた。